

2020年度城西大学オンライン中国語授業の 実施状況及び問題点

樊 穎

はじめに

2020年春、異常な速さで世界に広がり、パンデミックを引き起こした新型コロナウイルス感染症の影響を受け、多くの大学では遠隔授業によって授業が実施されてきました。本学においては、前期授業の開始を一か月ほど遅らせたうえ、オンラインで実施することとなり、後期授業も対面授業とオンラインを併用して実施することとなりました。

中国語の授業も大学の方針に従って、一年間を通してオンライン授業および対面授業を実施してきました。授業の内容によって遠隔授業に向いている授業もあれば、あまり向いていない授業もあります。語学の授業は、発音やリスニング、先生と学生とのコミュニケーションを重視するなどの特徴があり、対面授業で行ってきたことを遠隔授業でどれぐらいカバーできるか、不安も多くありました。特に中国語は英語と違って、ほとんどの履修者は、今まで中国語の学習経験がありません。そのため、基礎的な発音から漢字の書き方まで、今まで教室で教えていた内容をすべて遠隔授業で対応しなければなりません。どのようにしたら、履修者にとってわかりやすい授業ができるのか、中国語担当者一同がなるべく学生の目線から授業の構成や内容を工夫し対応してきました。

今後の中国語教育の質の向上および課題の改善のために、2020年度の中国語オンライン教育の取り組みおよび問題点をまとめました。

一 本学の中国語教育の現状

本学の中国語オンライン教育の取り組みを紹介する前に、本学の中国語教育の現状を紹介したいと思います。

語学教育センターでは非常勤講師を含め、中国語の担当教員は4人在籍しており、坂戸キャンパスと紀尾井町キャンパスで大学及び短大の全学部・学科、全学年の学生を対象とする中国語授業を担当しています。開講状況は年によって変わりますが、だ

いたい毎週月曜日から金曜日まで約20コマ近くの中国語の授業を行っています。

語学教育センターが開講している8つの第二外国語の中で、中国語の履修者数が比較的が多いため、対面授業の時に、毎年、1クラスの履修上限60名という人数制限をかけています。しかし、それでも語学の授業にとっては、大人数のクラスになります。限られた授業時間の中で、大人数のクラスの履修者一人一人に、いかにきちんと講義内容を伝えていき、授業の質を保っていくかは、中国語担当者にとって大きな課題です。

今まで、共通の教材を使用し、共通のシラバスを作成し、授業内容や難易度、進捗具合などについておおよそのガイドラインや試験基準を設けるなどして、常にお互いに授業に関する共通認識を確かめ合いながら深めてきました。

二 2020年度前期の中国語オンライン授業の取り組み

2020年度前期は、通常より1ヶ月遅れて新学期が始まりました。大学の方針をふまえ、大学のオンライン教育システムやネット環境などを考慮した末、語学教育センターでは、語学の授業は主にWebClassとCloudCampusを利用するオンデマンド型のオンライン授業を実施する方針を打ち出しました。

授業開始までの準備期間が短く、かつ緊急事態宣言下で外出を控えている状態のなか、非常勤の先生は新しいシステムに慣れる機会も時間の余裕もありませんでした。オンライン授業に必要な機材および技術的な面のことを考え、それぞれの先生が単独でオンライン授業を開講するのは難しいと判断され、中国語のクラスにおいて、統一のオンライン教材を作成し、それを利用したオンデマンド型のオンライン授業を実施することと決まりました。

統一オンライン中国語授業の実施が決まってから、まず直面するのは、履修者数の制限の問題です。今までと違って、学生は直接各学部の窓口履修手続きを行うわけではないため、オンラインシステムで行う履修手続きや人数制限の手続き、そして履修時間やクラスの変更手続きなどの事務的手続きの難しさと大変さを初めて実感しました。統一オンライン授業を行うことで、中国語の全クラスの履修者が1つのコースに集中してしまい、短時間で400人近くの履修希望者のアンケートを確認し、入力作業を行わなければならないため、その作業の難しさがさらに倍増してしまいました。ここで改めて中国語の履修制限の作業に関わった関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。最終的に前期1年次と2年次の履修者は合計約380人となっています。

前期は、週1回の中国語科目「中国語ⅠA」「中国語ⅡA」では、WebClassとCloudCampusを使用したオンデマンド型オンライン授業を実施し、少人数の語学教育センター講座中国語コースの「中国語集中トレーニングⅠA」「中国語集中トレ

ニングⅢ A」では、Zoomを利用したリアルタイムオンライン授業を実施すると同時に、WebClassとCloudCampusも併用していました。

細かい解説が必要な講義内容はパワーポイントで作成し、録音録画してから、mp4動画形式に変換してCloudCampusにアップロードします。同時にその資料をPDF形式でWebClassで公開します。課題や練習問題などは、学生が入力できるようにWord形式で配布します。学生たちが学習や復習するときに見直しやすいように、講義資料も練習問題と同様にダウンロードできるようにしていました。また、WebClassのテスト機能を利用して、リスニングテストや小テストを作成し、メールやチャット・掲示板機能などを用いて質問や課題の受付などをしていました。前期の期末試験もWebClassを利用し、リスニングと筆記のオンライン試験を実施しました。

前期の最初のころは、まだWebClassやCloudCampusのシステムに慣れていない学生が多く、システムの利用方法や資料の見方、課題の提出の仕方などについての質問や問い合わせが多かったです。しかも、全クラス、全学年履修者が1つのコースに集中していたため、掲示板の質問やメールの数も大量で、常にその対応に追われていました。前期の中間以降、学生も少しずつシステムに慣れてきたようで、メールや掲示板の問い合わせの数が次第に落ち着いてきました。

三 2020年度後期の中国語オンライン授業の取り組み

後期からは、教員も学生もWebClassやCloudCampusのシステムに慣れたところで、前期の経験を活かし、中国語の授業を1つのコースで統一授業を行う形から、各先生の担当クラスに分けて、それぞれの担当教員による授業を行う形に、受講形式を変更しました。また、学生と双方向のコミュニケーションを図るために、後期からはZoomを利用したリアルタイムのオンライン授業も実施するようになりました。

そのため、後期の中国語の科目の授業形態はさまざまです。担当教員によって、前期と同じくWebClassとCloudCampusを利用するオンデマンド型の授業を継続するクラスもあれば、Zoomによるリアルタイムの授業をメインにし、課題だけWebClassを利用するクラスもあります。また、主にオンデマンド型の授業を行いますが、数回に1回リアルタイムの授業を実施するクラスもあります。少人数の語学教育センター講座中国語コースの授業では、「中国語集中トレーニングⅠ A」は対面授業で、「中国語集中トレーニングⅢ A」はZoomとWebClassの併用する形となります。

授業形態はクラスによって異なるため、教材も前期のような統一のオンライン教材を使用せず、教材、課題、テストの作成をすべて各クラスの担当の先生に任せています。

後期のように、1つのコースに集中していた学生たちがそれぞれ履修しているクラ

スに「戻って」受講することによって、各クラスの担当教員と履修学生の間で、より直接的な双方向のコミュニケーションが取れるため、一定の程度教育効果の向上が実現できたと思います。

四 2020年度中国語オンライン授業から見えてきた問題点

一年間の中国語オンライン授業を通して見えてきた問題点は、たくさんあります。そのなか、最も重要な2つの問題点を以下のようにまとめました。

1、中国語のみならず、第2外国語の科目が共通している問題としては、パソコンやスマートフォンの入力の問題です。

中国語もほかの第2外国語も、ほとんどの学生は学習した経験がなく、発音もちろん、アルファベットや文字の書き方もわからない状態です。対面授業の場合であれば、教員は書き方を教え、学生はそれを実際に何度も書いて練習することも重要な学習内容です。しかし、主にパソコンやスマートフォンなどを利用するオンライン授業では、学生は日本語や英語の入力ができても、新しい第2外国語の言語の入力ができないのです。授業を継続するには、まずパソコンやスマートフォンに第2外国語の入力ソフトをインストールし、具体的な入力方法から教えなければなりません。ただし、それはパソコンやスマートフォンの機種によって異なるところがあり、パソコンの画面を隔てて具体的な入力方法を説明するのも難しく、なかなか伝わりません。

さらに、中国語は漢字の入力のほかに、ピンインの入力の問題もあります。声調付きのピンインの入力は、ある程度Wordのルビ機能で解決できますが、間違いが多く、中国語の声調の変化や「多音字」などにも対応できていないため、細かい調整が必要となります。そのため、初めて中国語を習う学生だけではなく、使い慣れていない教員にとってもピンインの入力は厄介なことです。

学生がパソコンやスマートフォンの入力ができないと、それを前提に、WebClassを利用する講義資料や課題、小テストや期末テストの内容も形式も大きく変えなければなりません。例えば、通常中国語の課題やテストによく出題される単語やピンインを書く問題や短文を訳す問題など、入力できないことによって出題できなくなり、問題の形式は選択問題と順番の並び替えのみに限定してしまうのです。オンライン授業で実際にピンインや漢字を書く機会が減ることで、期待される学習効果が達成できない恐れがあります。

2、前期では、オンデマンド型の授業が中心だったため、学期末のアンケートでは、中国語の発音ができているかどうか心配とか、中国語の発音をもっときちんと練習したいとか、先生に発音のチェックをしてもらいたいなど、多数の意見が寄せられました。後期では、リアルタイムのZoom授業を実施するクラスが増えており、教

員と学生の間により活発な双方向のコミュニケーションが取れることで、学生の発音に対する不安がある程度解消できるかと考えていました。

しかし、実際の授業では、発音のチェックで口の形や唇の動きなどをチェックする必要もあると説明したにも関わらず、ほとんどの学生は顔出しに対して否定的な反応を示しています。また、質問の返答や朗読などの要請にも、「マイクが故障している」とか、「声を出せないところにいる」とかの理由で断る学生がかなり多かったです。後期の半年間の授業で、一度も声を出していなかった学生もいます。メールやチャットなどを利用して質問に返答することにはあまり抵抗感がないようですが、実際に声を出して発音したり朗読したりすることに対する抵抗感がまだまだ強いようです。

発音が上手になりたい一方、声を出したくないという矛盾を、今後のオンライン授業の中で、どのように解決するかは大きな課題です。

五 本学独自の中国語オンライン教材を作成する必要性

本学の中国語の受講者数が多いため、限られた授業時間の中で、シラバスの授業計画通りに講義を進めながら、学生一人一人に対応する時間も機会も非常に限られています。それぞれの学生の学習状況を把握し、それに合わせて個別に質疑応答や個別指導を行うことも、やはり大人数のため、なかなかスピーディーに対応できず、学生側にとっては、授業効果の実感がすぐには得られません。

さらに、担当教員によって、オンライン授業の教材作成や対応が異なるため、教育効果の差が生じる可能性があります。特にオンライン授業では、利用できる学習システムがたくさんありますが、スムーズに使いこなせるまで、教員もかなりの学習が必要です。システムに慣れるまでに必要な時間は、人によってだいぶ異なります。その差が学生の学習効果にも影響をもたらすと思われます。

特に、今年のような緊急な状況では、すぐに利用できるオンライン教材があれば、対面授業ができなくても、オンライン教材の使用によって基礎的な学習が保証され、さらにZoom、teamsなどを利用して、学生たちの習熟度の確認や学習中の問題点の解決など、重点的に授業内容を絞ることができ、教育効果のアップにつながると期待できます。

中国語の発音と入門レベルの文法部分は、中国語の学習の基礎部分であり、オンライン教材を工夫して作成すれば、どの教員が、どんな教科書を使用して教えていても、発音と入門レベルの基礎的な内容を一通りまとめて学習できます。担当教員や使用教材の違いによって生じる教育の質と効果の差を、最小限に抑えることが期待できると考えています。

適切なオンライン教材があれば、学生は、週に90分間の授業時間にとらわれず、好きな時間に、何度でも繰り返し学習することができます。学生自身が進捗状況を把握し、自分の学習にもっとも合う学習内容や学習時間の配分ができるようになり、能動的な学習の実現につながります。

対面授業の場合でも、このオンライン教材を授業の一環として用い、履修者は授業前に学習ポイントを確認したり、発音の練習などをしたりすることができます。それによって、授業時間内では、教員はその習熟度の確認と問題点の解決に集中できるようになり、いわゆる「アクティブラーニング型の反転授業」ができるようになります。

また、すでにいろいろな出版社やネット上では、中国語のオンライン教材が提供されていますが、既存のオンライン教材を利用するには、著作権や利用料金の問題、契約（法人）などの問題があるため、一部利用可能な内容もありますが、すべての中国語の授業にその全部の内容を利用することができません。

上記の状況をふまえて、早急に本学の中国語教育に合った独自の中国語オンライン教材の開発が必要だと考えられます。

おわりに

本学の中国語教育の面においては、授業構成やカリキュラム、教授法などについての革新が進められています。これまでは、ゆっくり、慎重に、少しずつ進めていかなければならない、或いは、まだゆっくり進めていっても大丈夫だという気持ちがありました。しかし、2020年の予期せぬ事態によって、その変革が加速し、変革の必要性と緊急性がひしひしと目の前に迫ってきました。

2020年は目まぐるしい変化に満ちた一年間であり、たくさんの革新、挑戦と成長ができた一年間でもありました。本学の中国語オンライン教育は、まだまだ多くの問題点がありますが、その始まりとなる一歩を踏み出すことができました。